

強いチーム創りの着眼点

本物の“真剣”や“一生懸命”とは？

家内に外せない用事があるということで、息子が通う高校の保護者会に参加した。正直に言うと渋々出かけたのだが、今の高校生の日常が垣間見れて有意義であった。先生は「ゆとり教育の影響かどうかわかりませんが、依存心の強い子どもが多い傾向があります」とか、「遅刻をする生徒が増えているので、家庭でも生活指導をしてください」という話をされていた。その中で、「学力の差は、長期の休みを終えた時に開きます」という話を聞いた時に、私は「ん～、なるほど」と心で頷いてしまった。

この話をした先生曰く「当校に通う生徒は基本的に真面目です。ですから、授業は熱心に受けています。従って、授業中の学習で学力に差はつきません。家に帰ってから、どれだけ勉強をしているかどうかで差がつくのです。特に、夏休みは長いので、自宅学習が進んだ生徒とそうではない生徒との差は歴然と表れます」と言うのだ。

野球に例えると、試合で打席に立ったら、誰もが来た球を打ち返そうと真剣になる。営業に例えると、お客様を前にしたら、誰もがお客様の関心を引こうと一生懸命に話をする。このシーンで発揮している“真剣”や“一生懸命”は、本当の“真剣”や“一生懸命”ではないと、この先生は言っているのである。

実践の場で必死になるのは当たり前で、そこで成果を出すには、実践の前に、“真剣”や“一生懸命”を発揮しなければならない。

先生は、「実践の前の“真剣”や“一生懸命”さを図るのは、投下した時間である」と結論付けた。具体的には「学年が上がると、各課目の難易度はどんどん高まります。50分授業の内容を体得するには、予習、復習をあわせて100分の時間が必要です。基本ができていない時には、その科目の内容の理解が薄いため、予習にはあまり時間がかかりません。従って、復習に多くの時間を割くことで授業の理解が深まります。基本ができてくると、自分で考えられるようになるので、予習に時間を費やせるようになり、復習の時間が少なくなります」ということであった。

これは、仕事にも完璧に当てはまる。実力のない社員は、業務を始める前に「きちんと準備しろ」と上司に促されても、実は、何をしたいのか分からない。仕事では準備が不十分なまま業務に取り組ませられないので、上司は、準備した内容を確認しなければならない。そして不備な点を指摘する。部下は、この指摘を受けて準備をし直すことになる。まさに、この行為が復習に当たる。基礎力が身についた部下は、自分で準備ができるようになる。要するに、自ら予習ができるようになるのだ。

誰もが目の前の仕事は、“真剣”に“一生懸命”やっている。

しかし、この“真剣”や“一生懸命”は成果に結びつかない。

本当の“真剣”や“一生懸命”は、仕事の準備で発揮せよ。

そして、“真剣”や“一生懸命”は投下時間で図られる。

みなさんの職場では、本物の“真剣”や“一生懸命”が実行できているかどうか、この機会に確認してみてもいいだろう。

株式会社アッシュ・マネジメント・コンサルティング

代表パートナー 平堀 剛